



企画にあたって

安田 聡

(東北大学医学系研究科循環器内科学教授)

2020年3月、日本循環器学会「2020年 JCS ガイドライン フォーカスアップデート版 冠動脈疾患患者における抗血栓療法」が発表された。2019年3月に発表されたばかりの「急性冠症候群ガイドライン（2018年改訂版）」と「安定冠動脈疾患の血行再建ガイドライン（2018年改訂版）」のなかから、抗血栓療法の領域に焦点を当てた改訂である。班長の中村正人先生（東邦大学医療センター大橋病院循環器内科教授）・木村一雄先生（横浜市立大学附属市民総合医療センター心臓血管センター教授）のもと、限られた時間内で活発な議論がなされまとめられた。

今回の特集は、このフォーカスアップデートの作成委員の先生にも執筆をお願いし、抗血小板・抗凝固薬投与にまつわる改定のポイントをお示しいただくことにした。日本人を含めた東アジア人は、出血しやすいという背景がある。循環器疾患患者の予後改善を目指すためには、血栓リスクよりも出血リスクへの対応をより重視すべきという考え方のもと、出血リスクの指標として「ARC-HBR」(Academic Research Consortium for High Bleeding Risk) が定義された。経皮的冠動脈インターベンション治療（PCI）後抗血栓療法の多剤併用期間は全般的に短期化、安定期に入った心房細動合併例では抗凝固薬単独投与が推奨されるに至ったことも改定のハイライトである。また近年、抗血小板薬・抗凝固薬投与にあたり、より効率的な治療とそのための病態の正確な把握、個別化医療が推奨されている。

“Less is More” という言葉は、ドイツ出身の建築家、ミース・ファン・デル・ローエのもので、「シンプルなデザインを追求することでより豊かな空間が生まれる」というデザインのコンセプトを示したものである。抗血栓治療強化の時代から、“Less is More”（薬剤を減らしたほうが患者の利益は大きい）というコンセプトへの変換が起きている。